

野谷文昭書評「フェルナンド・アラムブル作・木村裕美訳『祖国』(上・下)河出書房新社 2021年4月20日刊」日本経済新聞 2021年6月26日朝刊を読む

ETA・バスク

### 独立運動に揺れる家族の姿

- (1) 幸せな家族はどれもみな似ているが、不幸な家族にはそれぞれの不幸の形がある。
  - (2) このトルストイの言葉を思い出させる小説『祖国』は、2つの家庭の不幸を描く。
  - (3) 舞台はバスクの小さな村。住民は顔見知りばかりだ。
- (1) 2つの家庭は交流があり、父親同士、母親同士は親友でありながら、両者の間に亀裂が生じる。
  - (2) 運送業で成功したチャットの一家は比較的裕福で、長男シャビエルは医師、長女ネレアはバスクの外で学び、弁護士事務所を経て財務省の役人となる。
  - (3) もう一人父親、ホシアンは鋳物工場の労働者で、美貌の長女アランチャは結婚し、子どもが2人できる。
  - (4) 次男ゴルカは文学賞を受賞する詩人で、ラジオ局でバスク語の番組を受け持つ。
- (1) 村は、バスクがスペインに従属するのを嫌い、独立を望む人々が多数を占める。
  - (2) そのため独立を<大義>とする武装集団 ETA に共鳴する傾向がある。
  - (3) ホシアンの妻ミレンもその一人だ。
  - (4) この集団は資金集めのために多額の金を要求し、同調しないチャットが狙われる。すると村人の態度が冷ややかになり、やがて彼は<処刑>されてしまう。
  - (5) 犯人は誰か。ETAの一員となった粗暴な長男ホシェマリだろうか。
  - (6) 彼が真犯人なのか。
- (1) しかし、小説はそう簡単に答えてはくれない。
  - (2) 邦訳で 700<sup>ページ</sup> 頁に近い大作を、作者は無数の断片からなるパズルにして、物語の流れを安易には作らない。
  - (3) 主要登場人物の印象的なエピソードがふんだんにあり、読者は断片を繋ぐ<sup>つな</sup>ことで小さな因果関係に絶えず行きあたる。陰惨なことばかりではない。
  - (4) アランチャの大病に治癒の可能性が見えてくるところや、ゴルカの同性結婚が祝福される場面など、ハイライトはいくつもある。
- (1) だが、ホシェマリの、組織の中での熱心な訓練ぶりや、遠隔の刑務所で受ける激しい虐待の様子などが、物語の底荷になっている。
  - (2) 大義とあらば暴力もいとわない人物でありながら、家族の一員であるがゆえに、読者は彼を憎むことができないだろう。
  - (3) 彼自身はチャットを撃ったことを否定している。だが妻ビジョリは彼に謝罪を要求する。
  - (4) 彼女にとっては赦<sup>ゆる</sup>すことが必要だからだ。

(5)それはまた、暴力に対する批判の象徴的行為としても読める。

(6)果たして和解はあるのだろうか。

#### <コメント>

スペインのバスク独立運動(ETA)に揺れ動く家族の姿が、2つの家族を通してていねいに描かれている。スペインで100万部出版された大ベストセラーです。訳者の木村裕美さんは、マドリッドに在住しながらスペイン現代文学を日本に紹介し続けている第一人者。是非、御一読ください。

2021年11月17日(水) 林明夫